

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間 : 2019/9/19 ~2019/10/31)

1. 勉学の状況

私は、イギリスのニューカッスル市にある Northumbria 大学という場所で、国際関係学と社会学を学んでいます。イギリスの大学では、留学生用の授業を受けることはあまりなく、現地の正規生の生徒と共に学んでいます。また、イギリスの大学は 3 年制になっている学部が多く、第 1 セメスター（前期）は 2 年生用の授業を 3 つ（1 つは聴講）と、留学生用の授業を 2 つ、とっています。

(右図 : 時間割、下記 : 授業リスト)

・ 国際関係学科

IR5008 Theories of international relations

・ 社会学科

S05003 Cotemporally social theories (聴講)

S05005 Global poverty and development

・ 留学生用

ELD0429 Colloquium on British Culture

YC5001 Academic language skills

基本的に専門の授業は、Lecture（講義）と Seminar（ディスカッション）がセットで各科目につき、週二回授業があるイメージです。

November 2019

	04 Mon	05 Tue	06 Wed	07 Thu	08 Fri
10 AM	IR5008 ACC1 Lecture/all				
11 AM		S05005 ACC1 Lecture/all <15, 17>			
12 PM					
01 PM			EL0429 ACC1 Off- Site Visit/ 01		
02 PM					YC5001 ACCY+/03 HUM and SOC SC L6 <10-17, 19-20,
03 PM		S05005 ACC1 Seminar/			
04 PM	S05003 Lecture (□□)				
05 PM		IR5008 ACC1 Seminar+/ (□□)			
06 PM					

S05005 Theories of International relations について

今回は、最も苦戦している国際関係学科 2 年生の授業の Theories of International Relations について書いていきます。この授業では、国際関係学の基礎となる考え方（リベラリズムやマルクス主義など）について学びます。毎回 2 つほどの資料（各 15-25 ページほど）を読んだうえで、セミナーを受けるため、毎週資料と格闘しています。多くの正規生は読まない、または軽く目を通すだけなそうですが、やはり基礎知識と言語に劣る私は、前もってリーディングを読み、意見を準備しておかなければなりません。読むスピードはまだまだ正規生の 2 倍以上かかりますが、渡航前の自主ゼミにおいて英語の論文を読む練習をしていたために、読み方がなんとなくわかることが救いです。

最も大きな勉学の困難は、訛りです。自分の持っている授業の先生は強い訛りを持たないため、講義はほとんどわかるのですが、イギリスの地方特有 (Geordie, Yorkshire)、または留学生の国特有のアクセント (しかも大きな声で話さない) で生徒が議論してくるので、一度話を見失うと追いつくのが難しいことが多々あります。また、この授業ではイラク戦争などの過去の事象をセオリーに当てはめて考えるのですが、その基礎知識が、まず日本の教育では基本的に取り上げられていないことや、多くのケーススタディがやはり欧州を中心としていることなどからも、苦戦しています。しかし、授業の後に講義ノートやスライドは必ず配布されるので、そこから追いつくことは十分可能です。

また、この授業では、去年の千葉大からの派遣生を通して紹介してもらった正規生や、そのほかの交換留学生と共に受けており、勉学において友人関係というのは大きな心の支えとなっています。

最初の一か月目で感じた留学前に準備しておくといいこと

- ・自分の専門科目の英論文に触れておく。(専門用語が日英でわかると、日本でも留学先でも学んだことが両方で生かされやすいです。)
- ・文系の場合は時事問題をケーススタディとして扱うことが多いので、BBC や Guardians などのニュースを日ごろから見ることも役に立ちます。また、多くのアジア系の文系の生徒が思うこととしては、社会問題を語る際に高校の世界史で習うはずのことがみんな当たり前のように頭に入っているの、基礎知識として映画等で学んでいます。
- ・セミナーというディスカッションが授業全体の3分の1以上を占めるので、「間違っても発言する」という場慣れ感が、千葉大でも Japanese Studies やゼミなどで予習しておくことが役に立ちます。

2. 生活の状況

住まい

住居は学校外の民間業者によって運営されている寮にしました。学校の中心まで10分程度で、そのほかの寮も基本的に学校を囲むように位置しています。寮(以下フラット)は5人でキッチンシェアしており、トイレとシャワーは各部屋に設備されている En-suite タイプです。内訳としてはイギリス人が3人、留学生が2人です。私のフラットでは、自分以外が最終学年であることから、「外を散策しよう」ということにはならず、各々の生活を過ごしている感じです。そのほかの留学生は、全てシェアするタイプの寮に住んでいて、留学生が多い場所は仲が良さそうなどところも見受けられます。しかし、交流が多いと同時に、トラブルもあるので、どちらを選ぶのかはデメリットも考えるといいと思います。

Freshers Week

最初の週の Freshers Week（新入生歓迎的なもの）では、みんなお金を使うことになります。約 10 日間、バーのはしご、ビンゴ大会、市街地観光など毎日昼から夜まで何かしらのイベントがあり、Freshers（ノーザンブリア大学で初年度の人たち）が多く参加しました。自分も最初の留学生向けのオリエンテーションで様々な国の友達を見つけ、イギリス人を含め様々な人と関わることになる一週間でした。やはり留学生によっては最初の時点で、国別、エスニック別に固まる現象は見られるのですが、個人的には様々な国の人と関われるコミュニティが欲しかったのと、日本人留学生が固まれるほど人数が少ないことから、積極的に様々な人に話しかけに行きました。基本的に自分から話さなければ友達はできないと思って行動しています。

友人関係

友人は、基本的にドイツ人、フランス人、スペイン人など EU 圏の留学生が多い気がします。正規生とは、パーティで会うくらいの仲の子は少しはいるのですが、普段から話す仲ではないのが、現状です。言語の問題もあるのかもしれませんが、同じように交換留学で来ているアメリカ人の友人達も他の留学生と関わる人が多いので、やはり正規生（主にイギリス人）はずでにコミュニティができていて留学生は入りづらいのかもしれませんが。ちなみに、千葉大に存在した LEX なるものはこの大学には存在しません。なので、今はハイキングサークルや隣の大学の Japanese culture サークルに参加してイギリス人の友達を作ろうともがいているのですが、課題が多すぎてそういったイベントにも参加できない状況です。課題が終わり次第、参加してみようと思います。

財政難

3 週間がたったころから、授業の精神的負担よりも財政の精神的負担が訪れています。親からの仕送りにプラスで奨学金を受けているのですが、奨学金は対象月の終わりにしか支給されないことと、寮の家賃の支払い時期が日本と異なる（約 3 か月分を前払い）ことなどから、お金のやりくりが非常に難しいです。特に、最初の月は食器を揃えたり、服を買い足したり（あまり日本から持ってこれなかったため）することによりお金が無くなり、その状況の中、3 週間もある 12 月の冬休みの旅行計画も 10 月の終わりには立てなければいけないので、今では全て Excel にまとめて財政管理をしています。

また物価に関しては、日本に比べ、野菜は安く、肉は同じ、魚は高いイメージです。歩いて 20 分のマーケットに行けば野菜は日本の 3 分の 1 以下の値段で買えるので、そこで一週間分を買い足して、節約しています。

3. その他

コミュニティと Brexit

ここからは、自らの留学の目的であった Brexit と移民について書いていこうと思います。まず、Brexit（イギリスの EU 離脱）について焦点を当てると、この学生と教員は、EU 離脱に

反対派が圧倒的に多く、現政権に対しての揶揄は様々なところで聞かれます。しかしながら、実際に Brexit の現状を深く知ろうとする現地の学生にはあまり会っておらず、離脱協定案や首相の状況について日ごろから話す人（教員含め）はあまりいない感覚です。そのことについて、イギリス人で同じ国際政治学専攻の友達に聞いたところ、「アメリカ国民がトランプの言うことを真に受けなくなったのと同じで、イギリス市民も政府に失望してるから、毎日ニュースに驚いていられないんだよ」と言われました。個人的には、これが今のイギリスの若者の政治的関心にどう影響しているのか、もう少し観察していきたいと思っています。

次に、コミュニティ（移民を中心）について焦点を当ててみると、ニューカッスル市には中国系の市民も多く中華街も存在します。一方で、大学には留学生が多く、ほぼすべての授業に EU 圏をはじめとした留学生がいるようです。やはり、マイノリティの中でも比較的多数派となる、中国系、ラテン系、インド系では様々なコミュニティが存在し、情報のやりとりや専用のイベントなども存在するようです。まだ、この移民や市民のコミュニティについては、あまり観察ができていませんが、今後は移民関連の教授や現地団体にもアプローチしていきたいと思います。

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2019/11/01～2019/11/30)

1. 勉学の状況

・中間課題

11月のはじめ、約授業の6-7週目に中間課題の時期が来ました。私は一つしかなかったのですが、約2000wordで「国際関係学の中の二つのセオリーの違いと共通点を述べる」というものです。ここの社会科学系のレポートのテーマでよく見るものに”Critically assess”というキーワードをよく見ます。つまり、ただ定義や事象を述べるだけでなく、しっかりと批判を織り込み、議論を組み立てることがやはりカギとなるようです。特に議論の組み立てに関しては、最低でも一つのエッセイにつき引用を15個必要とされていたため、その量の引用を英語で見つけていくのには、かなり苦労しました。



ここの授業で特徴的なのが、各授業にリーディングリストというものが備わっており、そのほとんどの資料がオンラインで読める点です。千葉大学にいるときは本を探すのに苦労していたので、オンラインのリーディングリストには物凄く助けられています。また、図書館は24時間で、サンドイッチ等の飲食も可能なので、家での勉強が苦手な自分としては、いつも家でサンドイッチを作り図書館に引きこもっています。

・自主勉強、各授業につき7-10時間！？

毎週行わなければならない自主勉強として、毎週のセミナーの予習、次週の講義の復習に加え、中間課題が終わるとすぐに期末課題のために論文や本を読まなければなりません。ある授業で言われたのですが、一つの授業科目につき毎週7-10時間の自習時間が求められているらしく、英語の論文に慣れてないことから自分には最低10時間必要だと感じるのですが、それを自らの習慣にしていくことがとても難しいです。自主勉強の習慣を作るためには、生活習慣も正さなければいけないと思い、ジムなども間にはさみながらルーティン化できるように頑張っています。

・第2セメスターにむけて

また、第2セメスターのクラスの希望申請が11月の終わりにありました。留学前に第1セメスターと共に希望申請を提出したのですが、また選びなおせるそうなので、来年留学しに来る方も第2セメスターのことは焦らずに決めなくてもいいのかもしれませんが、実際に、私は第1セメスターで異なるコースの授業を取っていたのですが、やはり自らの興味

関心分野、日本で学んでいた知識を活かしたいという考えから、第 2 セメスターからは社会学に絞って授業を取ろうと変更して、提出しました。

2. 生活の状況

・人付き合い

生活の中で、軽く落ち込むことは週に 2 回ぐらいあるのですが、日本でも落ち込みなれてきたため、重く病むことはありません。少しでも落ち込んだら、ジムに行く、おいしいご飯を作る、とりあえず人に会うこと実践しています。周りの日本人とも比べると、人付き合いの悩みは、みんな場所は違えど、抱えていると感じます。私の場合は、同じキッチンシェアしているフラットと、趣味や嗜好がうまく合わず、友達になる空気感でないことが悩みです。しかし無理にフラットの嗜好に合わせることなく、とりあえずは他のコミュニティで友人を作ることに専念しています。研究の視点からコミュニティというものに興味があるので、フラットとも仲良くしたいところですが、とりあえずは生活や心身の基盤を固めることを今は専念しています。

また友人関係においても、もともと住んでいたイギリス人は既に友人関係を築いているので、その中で親密な関係になることの難しさは、ほぼ全ての留学生が感じていることのように、やはり時間帯も合う留学生が友達になることが多いです。毎週パーティは誰かのフラットで催され新しい人に会うことはできるのですが、やはりイギリス人や正規生と友達になるのは頻度の多いクラブ活動が最も適していると今は感じています。

・財政面（お得に生きる）

今月は 12 月のクリスマス休暇に向け、節約の月でした。私自身がかかり食べるほうなので、食費が最もお金がかかります。そのため、野菜はスーパーの半額以下で買える Grainger' s market でしか買わなくなりました。外食は安ければ 6-8 パウンド(日本円で 900-1100 円)、普通の店に行けば £ 10-12(1400-1600)なので、できる限り控えています。(写真は Sunday roast と呼ばれる伝統料理で、£11)



また、イギリスでは学割が効く場面が多く存在するので、学生として登録できるサイト(Unidays)、交通カード(バス、電車のカード)は最初に登録しておくことがおすすめです。10-30%の割引が効くことが多いので、旅行から外食、買い物まで全てにみんな使っているようです。

・クリスマスマーケット

クリスマスマーケットが11月の中旬から始まりました。ダウンタウンの真ん中に急に出現して驚いたのですが、ニューカッスルのクリスマスマーケットは近くの都市のエディンバラに比べれば小さいほうだそうです。しかし、土日には渋谷並みの賑わいでレストランの予約も取れないほど人でにぎわっています。



3. その他

・Brexit と選挙

先月の31日に予定されていたEU離脱が延期になり、12月12日に選挙が行われることになりました。大学では、「選挙に登録して」という紙が配られています。また、Facebookでも自らが選挙に登録した場合拡散できるようになっていて、若者への政治参加のキャンペーンの大きさが日本とは違うことによりかなりショックを受けました。また、ダウンタウンでは、東ヨーロッパからの移民の人々で「EU離脱」に反対する人の演説だけでなく、「保守」と掲げた人々の演説も見られます。(ちなみに、ニューカッスルは2016年の離脱投票の際、離脱派が過半数を上回りました。)一方で、大学内では労働党(元々離脱に反対していた)の指示が大多数となっており、現政権の擁護はしづらい空気感を学生同士の話、授業では感じます。

海外派遣留学プログラム報告書
(報告期間：2019/12/1 ～2019/12/31)

1 勉学の状況

授業が終わりました。12月始めから授業がポツポツと終わり始め、中ごろには春休みに入りました。多くの正規生やエラスムスの生徒が帰省を始めます。課題は履修している三つの授業全てにおいてエッセイが設定されているのですが、締め切りは1月中旬です。来月が課題のことで書くことが多くなりそうなので、今回はその分生活面を書いていきます。

2 生活の状況

・コミュニティ（サークル活動）

ノーザンブリア大学には様々なソサエティ（サークル）とスポーツクラブがあります。スポーツクラブは最初の月に年会費を払うのと、それが£100-120(14000-1800円ほど)かかるので、大学のジムにすでに£120払っていた私には財政上所属することはありませんでした。そのため、年会費が£5のハイキングソサイエティに入りました。10-11月は隔週ハイキングに行くイベントが計画されていたのですが、交通費で一回£20だったため、その時の財政状況的にもあまり参加することができませんでした。（写真は一度参加した、エディンバラの丘での頂上で）



そうこうしているうちに、12月に入り、ほとんどの友達が半年で帰る留学生であったことに気づき、新しいコミュニティを作らなければならないことに気が付きました。一方で、ノーザンブリア大学にはそのほかに自分の興味があり、かつお金を浪費しないサークルを見つけることができなかつたので、隣のニューカッスル大学のサークルに潜入してみることにしました。

・ジャパニーズソサイエティ

ニューカッスル大学のサークルで最初に興味を持ったのが、ジャパニーズサークルでした。このサークルは日本語をはじめとした、日本文化に興味のある正規生と日本人留学生で構成されており、簡単に友達ができるのではないかと思い入ってみました。やはり、全く自分に興味のない学生と一から友達になるよりも、話の盛り上がりは違いました。このコミュニティだけに、とどまっておけばいいとは思っていませんが、一種のネットワークとして所属していることは意味がありそうです。一方で、このソサエティの中でも興味深かったのが、中でのグループ分けでした。日本人留学生と正規生お互いに興味を持ち交流を図る場だと思っていたのですが、日本人だけで固まるグループ、正規生のグループ、交流するグループときっちり3つに分かれているのです。最初に、正規生だけで固まっているグループに話しかけたのですが、グループに入れてもらえず、かなり驚きました。また、日本人で固まっているグループにも、なぜ正規生と話さないのか聞いてみると、「ほら、日本人ってシャイだから。」と言われてしまいました。なぜ、この場にきたのか聞きたくなる答えでした。しかし、交流するグループでは親しい友人もでき、年が明けた後は、それを自らの新しいコミュニティとして認識できるよう積極的に参加していこうと思います。

ソサエティの中でも感じたように、私たちの多くは、できるだけ心地の良いコミュニケーションを選びたいことが度々あります。異なるバックグラウンド、文化を持つ人々と交流するのは、最初はものすごくパワーを要します。一方でそのパワーを持続するためにも自らの居場所を確保しておくことが重要なことにも気づきました。しかし、そのような交流にそれほどまでのパワーを要しているのは、自らがただ信じてしまっている固定観念からきていることも多いと思います。実際に意図的に様々な人と話すように4か月間行っていると、必要なパワーがそこまでいらなくなっていることに最近では実感しています。

3. その他

差別とは

今回は少し重い内容ですが、自らの関心分野の移民にも関係するので、ニューカッスルでうけた差別(?)について軽く書いていきたいと思います。約4か月この地に住んでいるのですが特に直接的な差別発言を受けた経験はまだありません。しかしながら、間接的に嫌な発言をされて「あれ、これって差別なのかな。」と感じた経験は2, 3回ほどあります。これらの経験は全てお酒が提供されている場所で起こったことなので、日

ごろからそのような経験をすることは、かなり稀だと思います。特に衝撃を受けたのは1月1日に行ったクラブでのことでした。友人たちと楽しく時間を過ごしていると、25-30歳くらいの現地の男5人くらいが私に近寄ってきて、何かを叫び始めました。最初は何を言っているのか聞こえず、聞こうとするそぶりを見せたのですが、彼らのジェスチャーを見て、自分が挑発されているのだと気づきました。お酒が絡む場での、もめごとはこの街では見慣れた光景だったのですが、今回は急に、一方的に自分に向けられたので正直驚きました。すぐにその場を離れたのですが、やはり4、5人いた私たちのグループの中で自分だけに焦点を当てられたことに対して考えさせられました。おそらく彼らの立場からすると、酔っているし、特に差別発言はしていないので、その認識はなかったのかもしれませんが。しかしながら、そのクラブで唯一のアジア系の男性だった私に焦点を絞ったのは、偶然ではなかったと私は感じました。

このような経験をするたびに、なめられないように体を大きくしようと考える自分があります。一方で、見た目関係なくこのような差別が悪いのだとも理解しています。本来ならば自らを変える必要はないのかもしれませんが。このように自らの正しいと思うことと、自らを守るためにやらなければならないという気持ちの葛藤を繰り返すのも、この留学中に日々得ている学びなのかもしれません。

※留学を考えている方への補足(ちなみにノーザンブリア大学をはじめとしてイギリスの大学には多くの留学生が存在し、授業でも必ず3人以上は留学生がいることが多く、学生間で今回話したようなことが起こる可能性はほとんどないと思います。今回は現地の若者たちだったのですが、基本的に時間帯、場所、客層に注意していれば、そのような経験に会うことはまずなく、実際にとっても安全な街であることは確かです。)

【写真はだみそかのパーティーです。】

写真のようにいつも楽しんでいるので、そんなに暗い毎日ではありません！
(笑)



海外派遣留学プログラム報告書
(報告期間：2019/1/1 ～2019/1/31)

1. 学業面

・セメスター1 最終課題

年明けから、謎の病にうなされ約10日間ベッドで寝込んでいました。課題の締め切り前で、全てのスケジュールで課題をしなければならぬ時期に来ていただけに、とても落ち込むことになりました。しかし、イギリスの大学では病気になればlate authorizationというシステムにより最大10日間課題の提出を伸ばせるシステムがあると知り、なんとか、それに申し込みました。とにかく、何かがあれば直ぐにAsk4Helpという学務に行くことをお勧めします。24時間空いていて全ての手順を教えてください。今のところイギリスのサービスで一番しっかりしていると感じるほどです。(単純に他にダメなだけなのですが、)

1月の最終課題の内容としては、①Theories of international relationsの2000wordと②Global development and povertyの3500wordでした。前者はテーマを10近く提案され、その中から1つ選ぶもので、後者は大きな括りの大問に対し自ら焦点を設定し、深く論述するものでした。どちらも課題のテーマが広い分、どのように論述するのかに悩みました。チューターに会いに行き自らのテーマ設定についてフィードバックを貰うのが、最も効率の良い方法だと考えます。また、良い成績を取る生徒は一つのエッセイに対して、2週間ほどかけます。

※参考。下記に課題のテーマを書いております。

- ① マルクス主義とネオマルクス主義は国際関係学にどのように影響を及ぼしたのか。
- ② ‘Development’ has eradicated poverty in the global south. という考えについて論述せよ

・セメスター2 授業一覧

次の学期が1月の最終週から始まりました。今回は全てSociologyに絞り、Sex and genderという授業と、Activism, Resistance and social changeという2つです。もう一つ国際関係学から授業を組まれましたが、やはり留学期間中は自らの興味に近い分野に力を入れたい、そして興味のある他の授業を聴講したいという思いから、その授業は切ることになりました。あまりよい例とは言えないかもしれませんが、自らの留学の目的に沿って取った行為なので悔いはありません。その代わりにその時間帯に隣のニューカッスル大学で行っている、Identity and difference in multicultural Britain (右図は後期の時間割です。IR5003の代わりに聴講をしています)



という授業を聴講させてもらえることになりました。前期も聴講はしていたのですが、後期は隣の大学に挑戦することができたので、校風の違い等も経験できそうで楽しみです。特に内容がここでしか学べない要素が詰まっているので、留学生は履修できなくても聴講を試みることを個人的にお勧めします。

2. 生活面

・イギリスの医療システム

学業面で私を苦しめた病でしたが、今回の病でイギリスの医療システムのややこしさを思う存分体験したので、来年以降留学する人に報告しておきたいと思います。(長いですが)イギリスでは、NHS という国民保険があり、それにより無料で医療を受けることができます。最初の在留登録の際にこの NHS によるかかりつけ病院(GP)が設定され、GP で初診を受けてから専門医などの大きな病院に行くことができるという流れです。私が当初知っていたのはここまででした。

1. 病院は基本行かない文化。

しかし実際病気になって、大きな3つの発見がありました。まず一つ目が、「風邪ごときで病院に行くべきじゃない」という文化があること。実際にイギリス人の友人に相談した際も、「医者に行っても、栄養と水を取れしか言われぬよ。」と言われ、NHS のホームページにも「7日間たっても体調が回復しない場合」医師に診てもらったほうがいいと書いている始末です。

2. GP の予約が2週間後(場所による)

しかし、今回の私の病状は5日たっても良くなりならず、発疹が出始めており、ただの風邪ではないと確信したため、GPに行くことを決意しました。そこで2つ目の発見です。GPに行くには、前もって予約をすることが必要でしたので、電話を掛けたところ「空いているのは2週間後です。」と言われてしまいました。その瞬間、自力で治すことを決意しました。何のための、病院なのか混乱しました。

3. 予約なしでいける病院が実はある

自力で体調が良くなってきたところに、課題の延長には医師の証明が必要だといわれました。そこで、学校の事務の人に自らのGPの混雑(?)を伝えると、3つ目の発見がありました。「それなら、緊急用の Walk-in Centre に行けばいい。」と。前回、GPに電話した際に全く教えてもらえなかったのですが、イギリスには予約しなくても見てもらえる緊急用の病院があるとのことでした。なぜ、GPは教えてくれなかったのか腹が立ちましたが、とりあえず緊急用の病院でやっと診てもらうことができました。

しかし、病院はここでは終わりではありませんでした。診察結果を貰いたいとお願いしたところ、ここでは個人情報渡すことが許されていないと言われてしまいました。結果、無駄に大きな病院にたらい回しにされた後、そこでも渡すことができないと言われ、最終的には、診てもらった緊急用病院からわざわざ登録先のGPにデータを送ってもらい、GPでその

情報を印刷するという、なんとも意味の分からない手順を取られました。しかも GP とも一週間交渉の後、やっと発行。

4. 日本の保険会社はキャッシュレスを謡っているが、実際はロンドンにしか提携はない

ちなみに、日本の保険会社にも電話しましたが、おそらくどの保険でも提携先の病院がニューカッスルにはないでしょう。そのため、保険会社の方がキャッシュレスで診てもらえないか交渉してみると言い、待たされますが、待っても無駄でした。私の保険会社は1日かけて見つけることができませんでした。私立病院に行く場合は建て替える覚悟で、自分で行くことをお勧めします。

5. 最初にやることは111に電話をする。(英語で症状の説明必要)

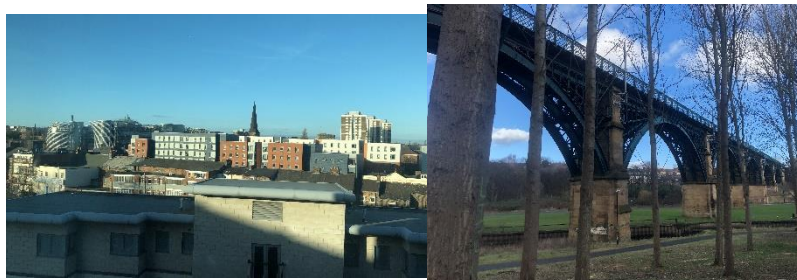
最後に、イギリスでは病気になった際に、かかりつけの GP に電話するよりも、NHS の番号の111に電話したほうが良いと思います。電話越しですが、症状を伝えることができ、今病院に行くべきか判断してくれ、空いている病院の予約まで取ってくれます。今回の緊急用の病院もその手順で見つけることができました。

3. その他 Brexit

1/31 にイギリスは Brexit を迎えました。実際には1年間の離脱移行期間に入ったのみで、EU 圏の移動や学術の協定も含め、まだ何も変化はしていません。ここの留学には Brexit を体験したいと思ってきたのですが、実際には何も大きなことは起こりませんでした。というのも、ニューカッスルやマンチェスターなどの City と呼ばれる都心部では、残留派がほとんどであるために、Brexit を祝う気持ちにもなれず、日頃よりも静かな金曜を過ごしました。テレビで祝福として中継されるのも、田舎がほとんどで、都心部は全く盛り上がっていないかったのが印象です。一方で、スコットランドの都市であるエディンバラでは、大規模な独立運動がその日に行われ、Brexit を見るにはエディンバラに行くべきだったと思いました。(電車で1時間)その後も、特にイギリスの生活は変わりなく、それよりもコロナに人々の関心は動いているようです。来月はイギリスでのコロナの対応について書いてみようかと思っています。

【写真】

今年は暖冬で雪も降らず、イギリスとは思えない晴天の毎日です。



海外派遣留学プログラム報告書
(報告期間：2020/2/1 ～2020/2/29)

1. 学業面

・新しい授業、少し実感する成長

新しい授業が始まり約5週目になりました。授業科目は先月報告した通りです。授業内で非常に仲の良い友達はできていませんが、ディスカッションの中で発言することへの抵抗感はかなり減りました。3つあるディスカッションでは、全てにおいて毎回発言することができ、暫し満足感に浸れる日もあるほどです。発言できるようになった理由としては、専門分野に近づいたこと、語学力の向上、慣れです。特に、学生たちの人柄が話している中で分かってくるにつれ、彼らが私の語学力を気にしていないことなどがわかり、間違った文法で話すことに対する緊張感は減ったと思います。

・課題 中間課題の時期です。今期は1500ワードのエッセイが2つです。中間課題があるモジュール(授業)は、最終課題が少し軽くなるのと、最終課題一つだけだと単位が取れるのか心配になってしまうので、比較的ストレスもたまらずに取り組んでいます。

内容としては、Sex and Genderの授業では、与えられた2つの問いに対して750ワードずつ答えていきます。引用文献は各7つくらいにしました。今のところの感覚としては、2000ワードにつき、15文献くらいが平均のようです。もう一つのActivismの授業の課題は変わっていて、Annotated Bibliographyという、文献のレビューを行う課題です。毎週の授業から文献をひとつずつ選び、それを自らのリサーチテーマにどのように貢献するか各250ワードで述べていく課題でした。前タームに、かなり難しい課題を選んでしまったので、今期の課題は楽しく取り組んでいます。

最近、図書館に一人で朝から夜までいる習慣もついてきました。特に、図書館内では飲食が自由なのでサンドイッチを作り、籠ることが多いです。また、図書館に一日中いることから、近くのレストラン巡りも初めて見たので、来月はそれについて書きたいと思います。

2. 生活面

今回は、コミュニケーションという観点から留学の報告をしていきます。

・友人の現状

まず現状についてですが、ここ最近、留学生の友達がほとんど帰ったことで、イギリス人の友達をより増やそうと必死でした。ノーザンブリア大学には日本人は今期4人になりました。やはり同じ出身であっても、趣味が合うとは限らないため友達になるのは人によります。特にニューカッスルは夜の街で有名なので、それが好きか嫌いかで日本人の留学生の過ごし方は大きく分かれているような気がします。隣の大学のサークルに参加したこと

から、イギリス人の友達が増えて、今は友人にそこまで困ることもないかなと感じています。

・友達の作り方

個人的に友人を作り、仲を深めるうえで重要なのが、ホームパーティー（クッキング系も含む）だと思っています。日頃、授業やイベントで会うだけではそれ以上仲良くなりづらいです。授業が午前であればランチと一緒にいき交流を深める時間がありますが、今期は午後の授業しかないため、授業が終われば皆家に帰るので、そこで友達を作るのは難しそうです。無理に飲み会やパーティーに行く必要はないと思いますが、やはり文化として夜はお酒を飲みながら交流を深める場面が多いように感じます。（学生は夜、外に遊びに行く前に Pre Drink といって寮のキッチンで小さなパーティー（飲み会）を行うのが主流です）。

また寮のフラットメイトと仲が良ければそこで完結できる学生も多いようです。あいにく私のフラットメイトとは仲が良くないので、外で必死に友人を作っています。

・言語

来英して約6か月で、英語の能力の向上も感じることはできるのですが、やはり未だに最も厄介なのは言語です。別にネイティブのように話す必要はないと思っています。ただ、未だに人によってはアクセントがきつくて聞き取ることができません。様々な地方からの生徒が多いようですが、やはりノーザンブリア大学にはマンチェスターやシェフィールドを含む北部のイングランド出身の生徒が多い気がします。一方メディアでよく見るアクセントは北よりもやはり南寄りです。日本では方言があっても標準語で話してくれる人が多いかもしれませんが、ここでは人によって異なります。私が聞き取りやすいロンドン出身の子のアクセントは、他のイギリス人の子に Posh(上流階級)っぽいといわれていました。イギリスでは自らのアクセントを自らのアイデンティティ、ルーツと結びつける人が多く、アクセントを留学生のために和らげるのが難しい、あるいは和らげる気もない人がいることも確かです。

(対策) 彼らのように話す必要はありませんが、会話を成立させるためにリスニング能力は必要であると考えています。学生の話すアクセントに近いものは、若者が出るリアリティショー(Love Island, Geordie Shore)、学生または若者を題材にしたコメディドラマ(Fresh Meat, Lovesick)です。その他に Youtube も使っていますが、有名な Youtuber はアクセントを和らげているものが多いです。

3. コロナについて

まず、簡潔にまとめると日本ほどの不安感は感じられません。イギリスでの最初の感染者はニューカッスルで発見されましたが、特に市民の間での混乱はないようです。普段マスクをつける文化がないため、町でマスクを着けているのも一部の中国系のみです。

日本にいる友人と話していると差別を心配している声が聞かれますが、実際の私の感覚は逆です。学生が多い街だからなのか、差別を行う人は確実に批判される空気をどこでも感じます。大学の緊急メールの中にも、まず冒頭に「私たちは、多様性を支援する大学で、どのような背景を持つ学生でも支援します。」と書かれているように、差別への懸念と共に、差別に反対する姿勢を非常に強く感じます。また、コロナについて冷静に情報交換をすることが飲み会の場でも見られるほど、学生たちは非常に冷静に情報を得ており、差別に対する知識も学んできていることから、友人間でのそのような発言の可能性はなく、逆に日ごろよりもエスニックに触れるジョークは減っているように感じます。より蔓延すると、差別のケースも出てくるかもしれませんが、大学や友人たちのサポートが日々感じられるので、心配はしていません。